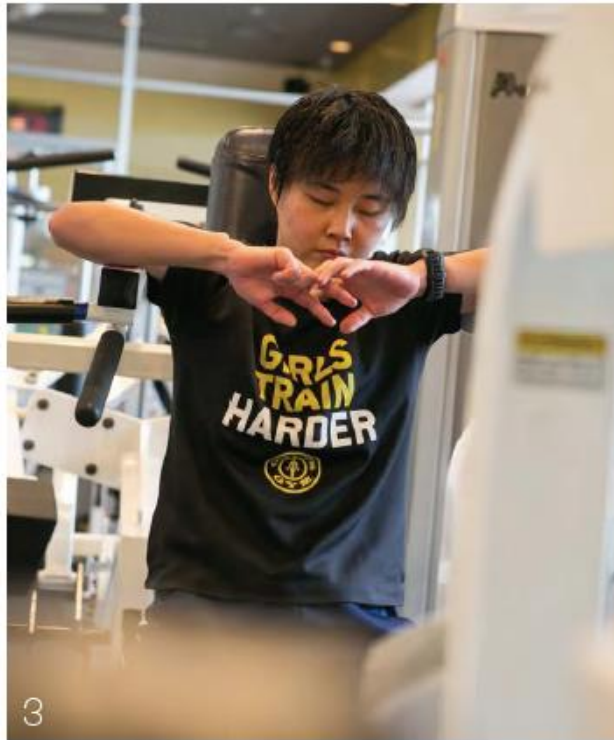




1. パラリンピックの自転車競技に日本の女子選手が出場するのは今回が初。前でハンドル操作をするパイロットは競輪選手の田中まい選手  
2. 3. 町田のジムでハードなトレーニングを行う鹿沼選手 4. 去る5月24日には視覚障がい者柔道の石川選手と共にまちだ市民大学HATSで公開講座を行った



鹿沼 由理恵 1981年5月20日 町田市生まれ 町田第二中学校、都立山崎高校卒業  
2015年トラック世界選手権 3km 個人パーシュート2位・タンデムスプリント3位 ジャパンパラサイクリングカップ 1kmトラックタンデム1位

# 特集3 タンデム選手 鹿沼 由理恵



2度目のパラリンピックでメダルを目指す  
逆境を乗り越えたアスリート

生まれながらにして両目の視力が0.02という障がいを持ちながら、果敢に世界に挑むアスリートがいる。  
高ヶ坂在住の鹿沼由理恵さんは  
パラサイクリング・ロード世界選手権で優勝経験を持つ  
リオ・パラリンピックのメダル最有力候補だ。

彼女が挑むのは二人乗り自転車  
でトラックを走る「タンデム」という  
競技だ。前方の健常者がシドル操  
作をし、後ろに障がい者が乗り一  
緒に漕ぐ。トラックの傾斜は最大で45  
度、最高速度は時速50キロ以上。  
2人の息がピッタリ合ってこそ、パ  
フォーマンスが発揮できるスポーツだ。  
目の焦点が合わない弱視だった  
鹿沼さん。幼い頃から「出来ない  
事は工夫すれば出来るでしょ」と  
母親に言われてきた。文字は横書  
きしか読めなかったため、国語の教  
科書は横にして読んだという。出  
来ないことは仕方ない。その中に  
出来ることを見つけて克服してき  
た。小学校から高校まで健常者と  
机を並べ、部活も陸上部に所属し  
一生懸命打ち込んだ。  
障がい者スポーツに興味を持った  
のは高校時代。体育の先生から長  
野パラリンピックで視覚障がいの金  
メダリスト小林深雪選手の話を知  
いた事がきっかけだった。  
現在は都内の会社に勤務し、週  
に2日、出社する。それ以外はジ  
ムに通い、上半身や体の軸となる  
体幹を鍛える日々だ。自宅の駐車  
場でリフトアップした自転車で行  
うトレーニングも欠かさない。  
リオは2度目のパラリンピックに  
なる。彼女は25歳のとき、障がい  
者スポーツセンターで勧められた  
「クロスカントリースキー」で世界を  
目指していた。初出場したバンク  
パーで7位入賞を果たすも、ソチ  
を目指し練習に励んでいた時に左  
肩の靭帯を損傷。選手生命を絶  
たれた。希望を失い失意のどん底  
にいたある日、一通のメールが届く。  
「私はパラリンピックで自転車競  
技にも出場しているの。あなたも  
自転車をやってみたら？」クロスカ  
ントリースキーのライバルで、ロン  
ド大会のパラサイクリング・ロード  
タイムトライアルの金メダリスト、  
カナダのロビー選手からだった。そ  
の言葉をきっかけに、彼女は再び  
戦い始めた。苦しく、辛い練習を  
重ね、ついに世界選手権で優勝す  
るところまで上りつめた。  
夢はリオデジャネイロパラリン  
ピック、そして4年後の東京パラリ  
ンピックでメダルを獲得することだ。  
障がい者スポーツの普及、自身の  
経験を若手選手へ伝えたいという  
使命感もある。そして、もう一つ  
夢がある。マッサージ師の国家資  
格を持つ彼女は「治療院を経営し  
て、お世話になった沢山の人の癒  
してあげたい」という。  
一度は断念した世界へのチャン  
ジ。2つの夢を抱き、彼女はスタ  
ーラインに立つ。